

譚海

津村正恭（涼庵）著 1795年頃より執筆

『譚海』卷二に

○信州戸隠明神の奥の院は、大蛇にてましますよし、齒を煩ふ者三年梨をくふ事を斷て立願すれば、はのいたみ立處に治する也、三年の後なしのみををしきにのせ、川中へ流し賽禮をなす事也、又立願の人戸隠に参詣すれば、梨を献ずるなり、神主を頼て奉納するに、神主梨を折敷にのせ、うしろ手に捧げ跡しぎりの様にして奥の院の岩窟の前にさし置き歸る、うしろをかへりみず、神主岩窟を十間もさらざるに、まさしくなしのみを喫する音きこゆと云、恐ろしき事也、

『譚海』卷八に

○信州戸隠山奥の院、九頭龍權現の洞穴も、其ふかき事をしらず、天台宗にて其僧相詰て、日々寅の刻に御供を備ふ、洞の中へ入事三町ほどにして、供物を備ふる所、杭を四本うちて、其上へ供物を箱に入たるまゝに置て、跡しざりして洞の口まで出歸とぞ、若き僧ならでは勤りがたし、權現の御心に叶たる僧は、年へてもつとむる者おほし、又暫時つとめて退く者もおほし、供物は箱の内にて日々うする事なり、又幾日も箱のうちにあるまゝにてある事も有、是も不思議とし、權現の御きげんよきあしきをうらなふ便とす、洞穴より本社の戸隠明神までは三十二町有、信州の六兵衛と云者信心にて、近來石碑を道

じるしに建て、三十二町を二十町にさだめたりといふ、九頭龍権現は白蛇にてましますよし、本地は辨才天といへり、洞穴の前に拜殿あり、ほらの口まではよほど高き所なるに、廊下をつくりそへて通行するやうにせしなり、山中冬は至て雪深ければ、雪なでとて雪の絶頂よりくづれおつるにおされて、人家多くそこなはるゝゆゑ、大盤石の本を楯にとりて、盤石より庇をかけたして、その下に冬春までは住居する事なり、雪なでくづれ落ても、盤石にさゝへて、住居のおしうたれぬやうにかまへたることとぞ、

『譚海』卷十に

○信州戸隠山は、甚おそろしき山なり、參詣のもの先神主の家に入て、行水齋戒して登山す、神主の家より本社まで半道計有、本社は山前にあり、山足に大成洞穴あり、九頭龍権現まします所なり、梨の實を備て帰り來るに、梨を喫する音聞ゆといふ、洞の前磐石有、そこに御供所ありて奉仕の僧輪番して守る、山は天台宗にて、江戸東叡山の僧年々交代して勤るといへり、

註 近代デジタルライブラリーの「国書刊行会」の「譚海」より (DOI 10.11501/1882242)。50' 155' 156' 189' 190 コマ目。「日本庶民生活史料集成」にも復刻あり。